

2011年8月7日 西福岡教会説教

中川憲次

説教題

「嵐の直中で」

聖書箇所

マタイによる福音書 第8章 23節—27節

イエスが舟に乗り込まれると、弟子達も従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは、近寄って起こし、「主よ助けてください。おぼれそうです。」と言った。

イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凪になった。人々は驚いて、「一体、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。

ちょうど本日の聖書の箇所をテキストにしたルターの説教があります。少し引用してみます。曰く、

「私たちは、いつも危険の中で振りまわされることを必要とするのである。だから自分の危険を感じ取る者は幸いであり、何も感じ取ることのない者は不幸である。」

ルターの説教をそのままここでお読みしても、きっと皆様の信仰の養いになると思います。しかし、それでは私はただの代読者になってしまいます。そこで、私がこの箇所を読んで与えられました言葉を語らせていただきます。

ところで、私は大学院の修士論文をアンブロシウスという人の讃美歌を研究して書きました。アンブロシウスは、あのアウグスティヌスに洗礼を授けた人としても有名です。彼は、文字の読めない信徒の信仰の養いのために讃美歌を作りました。現在、確実に彼の作品だとされる讃美歌は4つだといわれています。その讃美歌第1の4節に本日の聖書の箇所が出てまいります。1節から4節までをご紹介します。

1節

万物の永遠の造り主よ 夜と昼を支配するものよ  
あなたは時に変化を与え 退屈を和らげる

2節

やがて日の出の使者が鳴く 深い夜を見張り続ける

旅する者の夜の光 夜から夜を分かちつつ

### 3 節

目覚めの明けの明星は 天を暗黒からときはなつ

全ての迷う人々は わざわいの道をすてさる

そして4 節です。

「この船乗りは力をふるいおこし 波たかい海はなぐ ( pontique mitescunt freta,)

教会の岩そのものが この鳴き声で罪をきよめた 」

この4 節の前半2 行が本日の聖書の箇所を歌い込んでおります。ここを「この船乗りは力をふるいおこし／波たかい海はなぐ」としたところに、すでにしてこの聖書の箇所に対するアンブロシウスの解釈が前提されています。すなわち、弟子たちが乗っていた湖に浮かぶ舟は、教会を表し、イエス・キリストはその教会という舟をこぎ進めてくださる船乗りだということです。そして、「ポンティクエ ミテスクント フレタ」、すなわち「波は凪ぐ」のです。この讃美歌を歌いながら、アンブロシウスが牧した紀元300年代後半のミラノの教会の字の読めない信徒たちは、しかし生き活きと本日の聖書の箇所のイエス・キリストのお働きを感じ取ったことでしょう。

それにしても、

「この船乗りは力をふるいおこし／波たかい海はなぐ 」

とは、何と適切に過不足なくこの聖書の箇所を2 行で言い切ったことでしょうか。それでは、私も、イエス・キリストを私たちの福岡女学院教会という舟を漕ぎ進めてくださる船乗りと考えて、この説教を進めてまいります。

さて、人生は言わずもがな、試練に満ちています。試練とは何でしょうか。ルターは大変試練を重んじた人です。ルターは「ドイツ語著作全集第1巻への序文」の中でルターの勉強法ともいべきものを書いております。それは野口悠紀雄の超勉強法など足もとにもよらぬ素晴らしい勉強法です。ルターはその冒頭で、「神学研究の正しいあり方と方法とを示したい」として、次の三つの原則を示します。それは、「祈り」(オラティオ)、「黙想」(メディタティオ)、そして「試練」(テンタティオ)である、と言うのです。

勉強を始めるときは、これから学ぶ内容をよく学び取りうるように、「神が聖霊を送り、あなたを照らし、導き、理解を与えてくださるようにと祈るがよい」と申します。

次に、黙想についてルターは申します。「あなたは黙想すべきである。すなわち、あなたは聖書を単に心の中で繰り返すだけでなく、口に出して、

聖書の文字通りの言葉に従ってこれをいつも繰り返し、これに習熟し、一読、再読し、聖霊が言おうとすることに熱心な注意と考察を向けるべきである。これにあきて、一度も二度もすでに十分に読んだし、聞いたし、語った、なんでも根底から分かっているのだなどと考えないように、注意なさい」。

そして、いよいよ最後に試練が大切だとルターは申します。「試練こそ試金石である。試練は知り、理解することをあなたに教えるばかりでなく、神の言葉がすべての知恵にまさる知恵としていかに正しく、いかに真実で、いかに甘く、いかに愛すべく、いかに慰めにみちているかを経験することをも教える」。試練はラテン語でテンタティオと申します。このテンタチオというラテン語は、シェイクスピアの戯曲の題名テンペストに繋がるラテン語です。テンペストは「嵐」と訳されます。試練とは、まさに人生の嵐のことです。ルターは、その人生の嵐こそが私たちの学びを決定的に仕上げてくれると言うのです。例えば私がガンを宣告されたとき、私のこれまで学んできた神学が本物かどうかを試されます。その意味で、ガンは私にとって試金石です。私は聖書を教え説教してまいりました。しかし教えることは出来ても、その学んだことによって私が本当に生かされているかどうかは、ガンを宣告されたとき判明します。あるいは、それまでの学びが上っ面のものであったなら、ガンを宣告されて絶望の淵に立たされたとき、私の聖書の学びは決定的に深められるでしょう。そのように、私の学びにとって、試練は不可欠なほどに大切なものです。

ところで、試練に対しては、いくら周到を期しても、準備することの出来ないものです。その点、祈りも黙想も、私が努力すれば出来るものです。しかし、試練は神が与えてくださるものです。だからこそ、主の祈りで「試みに合わせないでください」と祈りつつも、私たちはその正に与えてほしくない試練をこそ、神様が与えてくださる時、それは実に喜ぶべきことだと言わなければなりません。

では、試練と何でしょうか。試練とは私たちの人生の舟の船乗りなるイエス・キリストに眠っていただくことです。親が元気で何でも整えて自分の人生に配慮してくれている内は子どもは親の有難味が分かりません。クリスチャンも、イエス・キリストが起きて働いて自分を守ってくださっている間は、その有難味が分かりません。そのご配慮を、当たり前くらいに思っています。しかし、イエス・キリストが私たちへの配慮を忘れ眠っておられるように見えたとき、私たちは慌てふためいて、「イエス様、おぼれそうです。助けてください」と叫びます。イエス・キリストが眠ってくださるといふ試練は、そ

のように私たちの心の底からの叫び声を呼び覚まします。心の底からの叫び声こそ、信仰の声に他なりません。

弟子にしてください 我が主よ 我が主よ

弟子にしてください 我が主よ

心の 底まで 弟子にしてください 我が主よ

これは少し前の説教でも歌った黒人霊歌です。まぎれもなく黒人霊歌でした。どこが、まぎれもなかったのでしょうか。それは、「心の底まで」というところでした。英語で *in my heart, in my heart* というところでした。これこそ、試練に次ぐ試練の直中に置かれていた黒人奴隷達の心の叫びだからでした。それは、まさに、試練が生み出した心の叫び以外の何ものでもありませんでした。

ここで、その黒人の市民権獲得のための公民権運動に、文字通り命をかけたマーティン・ルーサー・キング牧師の試練の極みの言葉を読んでみたいと存じます。ジェームズ・コーンという黒人神学者が書いた『夢か悪夢か・キング牧師とマルコムX』という書物の第5章「われわれは白人兄弟を愛さねばならない」から引用いたします。これは1956年1月27日、キング牧師27歳の時の体験だと言います。丁度その頃、キング牧師は、ローザ・パークス事件に端を発したバスボイコット運動に関係していました。ローザ・パークス事件というのは、アラバマ州モンゴメリー市で百貨店のお針子をしていたローザ・パークスという黒人女性が、後からバスに乗ってきた白人のために座席を空けるように強要され、それを拒否したために逮捕されたという事件です。この逮捕を聞いたキング牧師は立ち上がり、その頃行った演説の中で次のように言っています。

「ローザ・パークス夫人は、すばらしい人です。そして、あの事件が起こった時から、私はそれがパークス夫人のような人に起こったことを喜んでいきます。なぜなら、誰も彼女の計り知れないほどの完全さを疑うことができないからです。誰も彼女の高潔な人格を疑うことはできません。誰も彼女のクリスチャンとしての責任感の深さと、イエスの教えに対する献身の深さを疑うことはできません。」

このような演説を行ったキング牧師が、人種差別的な白人からどのように見られていたかは、想像に難くないでしょう。その頃のある夜キング牧師は一本の電話を受け取ります。では、先程申した書物から引用致します。

「深夜を少し過ぎた頃、バスボイコット運動の運営委員会から帰宅したば

かりのキングは呼び鈴と聞いた。「ニガー(黒んぼ)」とその声は言った。「俺達はお前やお前達のごたごたにはうんざりしてるんだ。もしお前が三日の内にこの町から出て行かなかったら、俺達はお前の頭をぶち抜くぞ。お前の家も爆破するぞ」。それまでにも彼は同じような脅迫電話を何度も、あるときには日に40回も、受けていた。しかし、なぜか今回の電話は彼を震え上がらせて、眠ることを妨げた。彼は「コーヒーでも飲めば気が楽になるかもしれないと考えながら」キッチンに行った。」

そして、そのキッチンで決定的な体験をキング牧師はいたします。曰く、「何ものかが私に語りかけた。お前は今父親に頼ることはできない。彼はアトランタにいる。170マイルも離れている。お前はあの何ものかに、お前の父親がかつて話してくれたあのお方に、道亡きところに道をお作りになることのできるあのお方に頼らなければならない。そこで私は、宗教は私にとってリアルなものでなければならない。そして私は自分自身で神を知らねばならないことを、発見した。私はコーヒーカップの上につっぷした」。

この体験をキング牧師は後に「キッチンでのヴィジョン」と呼んだと言います。このとき正に、キング牧師は彼の人生の舟で寝ておられる船乗りなるイエス・キリストに向かって、「主よ助けてください。おぼれそうです。」と言ったのです彼は嵐の直中で、イエス・キリストを発見したのです。

私たちの人生の舟においても、イエス・キリストがお眠りくださることがあるにちがいません。私の肩書きも、地位も、経験も、何もかも役に立たないようなときが、きっとあるに違いありません。そのような時こそ、私たちの人生の舟の船乗りイエス・キリストが眠っておられる時です。そんな時、私たちは自分の薄い信仰を思い知らされるでしょう。薄い信仰とは、どんな信仰でしょうか。それは多分、信仰ともいえない生活態度のことでしょう。聖書にはこう書いてあるけれども、そこはそれ常識で判断して行動しましょう、などというのが、いわば、「薄い信仰」でしょう。それは、本音と建前を使い分ける生き方とも言えるでしょう。それは、クリスチャンと称しながら、その実イエス・キリストに何の信頼も置いていない生き方でしょう。それは、心の底まで弟子にしてくださいという信仰の、対極に位置する生き方でしょう。

さて実は、私たちはきっと今、人生の嵐の直中にあるはずです。今このときこそが、肩書きも、地位も、財産も、経験も、何もかも役に立たない、人生の嵐の直中です。今日こそ、変な策略など弄することなく、眠っておられるイエス・キリストに気づいて、心の底から「主よ助けてください。おぼれ

そうです。」と叫ぶことしか、私たちに道は残されていません。

祈り 神様、私たちをして、イエス・キリストが眠っておられることに気づかせてください。そして、「助けてください」と心の底から叫ばせてください。この祈り、主イエス・キリストの御名によって御前におささげ致します。アーメン。